

以下の災害情報を壁新聞でご報告いたします。

事務局長会議にて災害対策の講演会

7月27日に2019年度全腎協 事務局長会議にて東京医科大学 血液浄化療法科 准教授の花房則男先生による災害対策の講演がありました。

講演内容は大規模広域災害に備えた災害対策についてで、日本は、活断層が複数ありフィリピン海峽のプレートが日本に潜り込んで、地震の発生がとて多く、とくに震度6以上の透析施設の災害対策が大切で、その際には4つルールがあるという事でした。

- 1つめはベットサイドコンソールを動けるようにする事
- 2つめは患者さんのベットを穿刺した針が抜けないように固定する事
- 3つめは、透析液供給装置を壁や床にしっかりと固定する事
- 4つめは、施設内の配管を堅いものでなくゴム製で柔らかいフレキシブルチューブを使う事

また災害時の通院先や被災地の地域の情報収集として日本透析医学会の災害NWメーリング情報を活用や、JHAT（日本災害時透析医療協働支援チーム）との災害時情報伝達の連携が大事である事と

さらに災害時に通院先で透析が出来なくなる事や避難生活も考えて、DWや禁忌薬、自身の透析情報などを記載しておく事と自分が透析患者であることを周囲に伝える事と

災害時に防災対策として、自分自身の命は自分で守る「自助」、地域コミュニティで災害発生時に力をあわせる「共助」、公的機関が個人や地域では解決できない災害の問題を解決する「公助」の3助のうち、非常に大きな災害の場合、公助がすぐに得られない場合が多いので、自身で行える自助を優先する事など、行政の協力や病院間と地域の連携を強めていくことで大規模災害に対応する重要性を講演会でお話されて、盛会のうちに講演会が終了しました。

かばんサイズの血液浄化装置が開発されました

山梨大学医学部の松田兼一教授の研究グループが、腎臓病の患者に使える、持ち運び可能な新型の血液浄化装置を開発しました。現在は小型冷蔵庫サイズの製品が多いが、新型はアタッシュケースより小さくて、血液を濾過する部分を従来の8分の1程度にし、血液を引き出すポンプも500円硬貨サイズにして、重さも電池込みで3～4キロになり機動性も向上しました

血液の量も多いヤギで新型装置の性能を確かめたところ最長で2週間血液を濾過し続けた。その間のポンプ交換は不要で、停止する事はありませんでした。



北海道腎臓病患者連絡協議会がヘルプマークの普及を進めています。

災害や緊急時に備えて、各自が透析に必要なお湯な情報を記入し、折りたたんで携帯できる透析患者世のヘルプマークの推奨を進めています。

興味のある方は、全国ヘルプマークネットワークのホームページからダウンロードできます。



A4サイズを6つに折ると、携帯できるヘルプマークカードに

災害時、緊急輸送にタクシー活用で船橋市が事業者と協定。

船橋市は、災害時に人員や必要な機材を迅速に輸送するため、千葉県タクシー協会京案文部と協定を締結したとの情報がありました。

大規模災害時に市の要請で、高齢避難者や病院患者、災害用機材の輸送などを目的にタクシーの出動が可能となり、市内外の約30社以上が加盟し寝台車や車いす搭載可能な車も含め約1500台のタクシーを所有しており「地元の道を熟知し、幅広い輸送体制を確立できる」などから協定締結に至ったとの事です。

壁新聞のお問い合わせは 全腎協事務局へ



TEL : 03-5395-2631 FAX : 03-5395-2831